

# Eureka X

六年制通信 No.2 令和4年4月15日(金)号

## 言辞施

確かNHKだと思いますが、幼稚園を経営しているフランスの修道女たちが日本の幼稚園教育の研修に来日した番組を放送したことがあります。もう何十年前のことですが、鮮明に覚えている場面があります。帰りのお掃除の時間なのでしょうか、園児たちが一列になって遊戯室の雑巾がけをしているのを見てフランス人の園長さんが驚愕するのです。園児たちはみな楽しそうでした。しかし他の修道女たちも一様に戸惑いの表情でした。私は自分たちの使った部屋を自分たちで掃除する日本の園児たちの姿に感動したからだろうと思っていたのですが、実際は違って、今度はこっちが驚愕する番でした。フランス人の園長は、どうしてこんな労働をこんな小さな子たちにさせているのかと憤慨しているのですね。これは教育ではなく虐待だと言うのです。これを聞いて私は笑ってしまいました。子どもを労働力とみなして酷使していたのは中世ヨーロッパではないか。イギリスはもちろんフランスも例外ではなかったはずです。イギリスなど、植民地では子どもに教育を受けさせなかったし、英語も教えなかった。支配階級の言語が理解できると扱いにくくなるからです。ルソーなどが出て、フランスは子どもの教育に熱心な国みたいに思っているのかもしれませんが、そんなのはごく最近の話です。子どもを大切に育てることにかけてはおそらく日本は世界一でしょうね。しかも断トツで。幕末から明治にかけて我が国を訪れた西洋の知識人たちの証言でそれは明らかです。だから私は嘔き出したのでした。

さて、それで日本の園長さんは何と言ったか。頼もしいことにしっかりとした教育観をお持ちのようで「これは立派な教育です」と胸を張って答えてみえました。公共の場所をきれいに使うのは私たちには当然のことだし、「来た時よりも美しく」というのも合言葉のようになっています。清潔な環境を保つことを小さいころから習慣にさせているという点で日本の園長さんの言葉は正しいですね。

習慣といえ、毎日のルーティーンを思い返してみても、普通は何らかの行動を指すと思います。しかし言葉の習慣もありますね。私たちの挨拶もそうです。「おはようございます」から「おやすみなさい」まで、つまり朝起きてから夜寝るまで私たちは毎日同じ挨拶を繰り返しています。何種類かの定型文を暗記して、特に考えなくても口から出ています。そういえば「いただきます」と「ごちそうさま」に当たる言葉の持たない民族もたくさんあるようで、考えてみれば不思議ですよ。私たちは「いただきます」と「ごちそうさま」で反射的に手を合わせるのに。これ、やらないと気持ち悪いですよ。それが習慣の習慣たるゆえんですけどね。

言葉を習慣とするなら、決まった挨拶以外に美しい言葉、ねぎらいの言葉、やさしい言葉などが自然と出てくるようにしましょう。それにはまず語彙を増やすことが大切です。「美しい」は英語で beautiful だと思っているでしょうが、他にも gorgeous, pretty, handsome, lovely, good-looking, fine-looking, attractive, exquisite, excellent などがあります。君たち、美しいを別の語彙でいくつ挙げられますか。ねぎらいの言葉はどうでしょう。やさしい語彙はいくつ知っていますか。たくさん知って、実際に使ってみましょう。そして、それを習慣にしましょう。

言辞施は「ごんじせ」と読みます。仏教でいうところの「無財の七施」の一つです。これはお金を使わずにできる施しのことで、体を使う「身施（しんせ）」とか人に席を譲る「床座施（しょうざせ）」、あるいは笑顔で接する「和顔悦色施（わがんえつじきせ）」（これは「和顔施」の方がわかりやすいですか）などがありますが、人にやさしい言葉で接することを言辞施というのです。お釈迦様は「人は口の中に斧を持って生まれてくる」と言いました。私はこれを人は言葉で他人を傷つけてはいけない、言葉にはそれだけの力があるのだから、という意味に解釈していました。確かお釈迦様の戒めに「不悪口（ふあくく）＝悪口を言ってはならない」があったはずですが、しかし、最近少し違うのではないかと考えています。悪口を言うと口の中の斧は人に傷を負わせるかもしれませんが、同時に自分をも傷つける、自分の口の中もその斧のせいで血だらけになる、そんな意味に思えてきました。言辞施を習慣にしようとするのは、本当は自分が傷つきたくないからかもしれませんね。

### 今週おすすめ

・遠藤周作 『深い河』 （講談社文庫）

始業式でほんの少しだけ非常に個人的な信仰の話をしました。学生時代に初めて聖書を読んだような言い方をしましたが、正しくは日本語の聖書は高校生のときから親しんできました。おそらく遠藤さんの影響だろうと思います。三浦綾子の小説にちりばめられるキリスト教の思想は極めて幼稚だと思いましたが、遠藤さんの『イエスの生涯』や『沈黙』には、一人の日本人として西洋の思想に対峙し昇華しようとする強い意志が読み取れ、私は大きな感銘を受けました。同時にカトリックには遠藤さんの考えは決して受け入れられないだろうと思いました。学生の頃知り合った神父様に、個人的なキリスト像はよくない、こんな場合イエスならどのように言い行動するか、などと考えるのは不遜なことだと言われました。遠藤さんの『沈黙』のことを言っていたのだらうと思います。あれから遠藤さんのほとんどの作品を読んできました。そして、『沈黙』においてもまだはっきりとは言わなかった東洋と西洋を融合するような自分の宗教観を語ったのがこの小説だと私は思います。

ちなみに手書きの原稿はアメリカのある大学に保存されているそうですが、最後の一行は、主人公は「死にました」から「危篤だそうです」に書き換えた跡が残っています。このエピソードを知ってから直した理由を考えていますが、未だわからないままです。

BGMは ミスチル の 終わりなき旅 でした…。